フェスタ 国立大学2016

CHIBA UNIVERSITY

平成28年度千葉大学文学部公開講座

愛と言語

主催　千葉大学文学部
後援　千葉市教育委員会
企画　国際言語文化学コース

愛の現実は、人類にとって、また人間のひとりひとりにとって、きわめて重要です。

しかし愛の現実にどう取り組むかについては、さまざまな工夫がなされていながら、諸問題に古代以来と同様の手探りの試行錯誤を繰り返すばかりのように見えなくもありません。愛は関係を作る源であり、また動きの源泉でもあります。このために愛は、人間に表現を要求します。表現を通してコミュニケーションを成立させねばなりません。この表現の手段は、言葉です。言葉がなくては愛は表現されません。しかし言葉の表現力はきわめて限定的で、このために、言葉に表現されると、愛にどこか損なわれるところが生じるのかもしれません。

愛と言葉のこの切り離せない関係、微妙で困難なところの多い関係、について、千葉大学文学部人文学科国際言語文化学コースの教員が、それぞれの立場からの真剣なアプローチを試みます。

日　時：2016年11月5日（土）13：00～16：30（受付開始12：30 途中，休憩有）

場　所：千葉大学人文社会科学系総合研究棟 2階 マルチメディア会議室

講　師：千葉大学文学部国際言語文化学コース教員

対　象：高校生以上の一般市民の方

受講料：無料

※申込みは不要です。ただし，座席数に限りがありますので，受付は先着順となります。
※当日は，千葉大学祭を開催中のため，お車での入構はできません。

【問合せ先】
大学文学部学務グループ
TEL　043-290-3631
E-mail　bhgakumu@office.chiba-u.jp

愛について考える上での諸問題入門：加藤隆

すべては愛だ、と述べても過言ではないほどです。しかし愛の前でただ茫然とするのでなく、適切に理解を進め、思索を展開することは可能です。一般的に、そして日本の今の現状において重要と思われる点を確認します。

愛の定義の試み。愛の成就と愛の喪失。愛するって怖い。愛するのでなく、愛に恋して、愛の言葉を愛している。愛の争奪戦 or 愛を手段とした拘束のあの手この手。自由でなければ愛はない？「(キリスト教における)世俗化」と「ロマン主義」における愛の崇拝。結婚と愛の相克。

「恋愛」の輸入 or 「恋愛」の発見。「愛は聖なるもの、でも愛は罪(？)」。大衆化社会と愛。愛の言説の社会化。「大人になるのは怖いけど・・・・」。「俺は男だ」。「男はつらいよ」。愛は「健康で持続可能か」。愛の能力は皆のもの？科学技術と愛。愛の不可能性 or 愛と死。

ウィリアム・フォークナーと愛のエクリチュール：山本裕子

パロール(話し言葉)とエクリチュール(書き言葉)という言葉の二側面とされるものについて考察したのは、フランスの思想家ジャック・デリダであった。著書『グラマトロジーについて』において、近代西洋では、話された言葉が、より発信者の意識に忠実なものとして、書かれた言葉よりも重視されてきたと指摘する。

この指摘を、愛のコミュニケーションに当てはめてみよう。耳元でささやかれた愛の言葉と手紙にしたためられた愛の言葉では、どちらがより発信者の愛情を誠実に伝えるだろう。「あなたに永遠の愛を誓います。」目の前にいる相手から直接伝えられる一度きりの言葉を思い返すのと、そう手書きで書かれた手紙を読み返すのとでは、どちらが幸せだろう。

アメリカのノーベル賞受賞作家ウィリアム・フォークナーの場合、書き言葉こそが、究極の愛の伝達手段と考えていたようである。ラヴ・レター(愛の手紙／文字)としてのフォークナーの著作を、作家の実生活における恋愛事情と絡めながら紹介したい。

Love（愛）とメタファー ― 認知意味論の観点から：　鎌田浩二

Love(愛)を他者に伝えるのに言葉がしばしば使用されます。しかし、なぜそもそも我々はlove(愛)のような目に見えない抽象的なものを理解できるのでしょうか。この疑問に対して、レイコフ＆ジョンソン (1980) [Metaphors We Live By『レトリックと人生』渡部昇一他訳]は、「メタファー」を使って説明しています。

従来メタファー(隠喩)は、「言葉のあや」のことであり、修辞技法の一つとして言語特有の問題であると考えられてきました。しかし、レイコフ＆ジョンソンは、メタファーは特別な言語表現にだけでなく、日常の思考・行動等のいたるところに浸透していることをはじめて体系的に示しました。彼らの主張するメタファーは「概念メタファー」と呼ばれ、従来の比喩的表現は概念レベルのメタファーを言語で具現化したものと見なされます。本講義では、概念メタファー理論の枠組みでlove(愛)について話す予定です。言語学等の専門知識は必要としません。

愛と他者性　：　土田知則

「愛」という言葉を聞いたとき、皆さんはどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか？おそらく、多くの人は、心地よい形容語――優しい、暖かい、誠実な、穏やかな、平和な、等々――とともにそれを把握しようとするでしょう。つまり、「愛」とは人々の和合的・融合的な関係から生じると考える人が圧倒的に多いのではないかということです。しかし、高名な文学者や思想家のなかには、そうした「愛」の理念に異を唱え、それとはまったく異なる視点から「愛」や「愛の言葉」について思索しようとした人たちがいます。それは「愛」をコミュニケーションではなく、ディスコミュニケーション(コミュニケーションの不可能性)の問題として思考しようとすることです。「愛」を「他者性」という視座から把捉しようとすること、と言い換えてもよいでしょう。

本日は、そうした問題をフランスの小説家マルセル・プルースト(1871-1922)、およびフランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス(1906-1995)のエピソードやテクストを題材にお話してみたいと思います。